第 40 回加藤周一文庫公開講読会
2023 年 11 月 4 日

『続羊の歌』「京都の庭」を読む（前半）

立命館大学大学院文学研究科　福井 優

I.　概要

◦ 加藤周一（1919～2008）「京都の庭」『続羊の歌』岩波新書、1968 年、34～45 頁、改 39～51 頁。初出『朝日ジャーナル』1967 年 7 月 30 日号

◦ 本章は、広島での「原子爆弾影響日米合同調査団」から戻り、渡仏するまでの約 5 年間を対象とする→前章の「一九四六年」は公的な活動（文筆業と血液学研究）を扱い、本章「京都の庭」は私的な活動が描かれる[1]

◦ 本章の構成：①「京都の女」と「京都の庭」（1940 年代後半）、②フランス留学のための試験（1951 年）、③母織子との死別（1949 年）、④フランス留学のための準備（1951 年）⇒この 4 つの話題を通じて、加藤は何を描きたかったのか？　フランス留学の動機が語られる

加藤は「その女（ひと）」に会うために、しばしば京都に行った。京都に生まれ育ち、若くして夫に先立たれ、子どもが一人いる「その女」を、加藤は「愛していると思っていた」。「その女」の話す「京都弁」は美しく、東京で育った加藤は、そこに「一種の故郷」を感じていた。またこの頃、加藤は京都の竜安寺や西芳寺といった古寺の庭にも足を運んでいた。「西洋人の考えを翻訳し、解釈し、議論することに忙しく、東洋の古い文化は、捨ててほとんど顧みな」い東京に対して、京都には「室町時代から変らず、しかも現代の日本からは全く忘れられた多くの寺とその庭があった」。ある秋の日の午後、ある禅寺の庭で加藤は不思議な経験をした。庭を眺めていると、それは突然起こり、加藤は「その世界」と自分自身との間に「確かな関係」があることを確信した。加藤は「その女」にも「その世界」の反映をみていた。京都の「庭」や「女」によって、「ある一つの確かなもの」を掴んだ加藤は、「日本の庭」によって自身の文筆活動を始めることになった。また庭を見ることで、「日本文化」と自己との間には確かな関係があることを確信した加藤は、次に「西洋の文化と遠い昔の日本の文化とは、私にとってどうちがうのか」という問題に答えるために、「西洋見物」の望みを抱くようになる。

母は胃癌を患い、その病状は悪化の一途を辿っていた。医者である加藤は母の恢復が見込めないことを知りつつも、懸命に処置に当たった。しかし、母はこの世を去り、加藤は放心状態の後、烈しい後悔に苛まれると同時に、自身の生涯を母の死を境に別けて考えるようになった。また母はカトリックを信仰していたが、加藤は信者ではなかった。だが加藤は母の死後、しばしばもし天国があれば、そこで母に会えるかもしれないと考えることさえあった。西洋見物の望みは強くなり、遂にフランス政府半給費留学生に合格する。当初は、加藤は彼女との結婚の約束もあり、1 年ほどで帰国するつもりであった。しかし、欧洲での滞在は長期化し、何年も経って京都の庭へは帰ってきたが、「その女の許へは帰らなかった」。

---

[1] 猪原透「『続羊の歌』「一九四六年」（前半）」第 38 回加藤周一文庫公開講読会配布資料、1 頁。

II.　解説

第 1 段落　京都の女(ひと)

その女(ひと)のために私はしばしば京都へ行った。私は彼女を愛していると思っていた。あるいは、愛していると思うことと、愛していることとは、つまるところ同じことだと思っていた。そして「愛している」という言葉に意味があるとすれば、それは相手のために私が何をすることができるか、そのことの量に応じてだろうと考えていたのである。彼女は、細いやわらかい声で、唱うように京都の言葉を話した。日常のつまらぬ言葉の端にも、かぎりなく甘美な一種の味があった。東京で育った私はそこに他国を感じ、また同時にあらためて一種の故郷を感じた。いわゆる「京都弁」を美しいと思ったのではないが、「京都弁」がたとえようもなく美しくなり得るということを知ったのである。これほど優しい言葉を聞いたことがない、と私はいった。彼女は、涼しい眼で笑いながら、これでも頑固で手のつけられないことがあるのだ、といっていた。女だから頑固であってはならない、という意見において彼女は頑固であったのかもしれない。およそ議論をしなかったから、彼女を説得することは不可能であったともいえるだろう。京都に生れて、育ちながら、町へ出ることは少かった。若くして死んだ夫は、仏教学者で、唯識論に凝っていたらしいが、彼女自身は仏教に興味をもっているというのでもなかった。子供が一人あって、近所の小学校へ通っていた。その子供の世話をしながら、ひっそりとして、うす暗い家のなかに、浮きだすように白いその顔があった。(34～35 頁、改 39～40 頁)

(1)「その女(ひと)のために私はしばしば京都へ行った」

- 「その女(ひと)」に対して、「私は彼女を愛していると思っていた。あるいは、愛していると思うことと、愛していることとは、つまるところ同じことだと思っていた」のような婉曲的な表現が多用される。「女だから頑固であってはならない、という意見において彼女は頑固であったのかもしれない。およそ議論をしなかったから、彼女を説得することは不可能であったともいえるだろう」→この問題は、後の段に関係すると共に、本章以降にもかかわってくる
- 「その女(ひと)」は、「細いやわらかい声で、唱うように京都の言葉を話した。日常のつまらぬ言葉の端にも、かぎりなく甘美な一種の味があった」→京都と東京が対比的に表現され、「東京で育った私はそこに他国を感じ、また同時にあらためて一種の故郷を感じた」⇒「京都弁」に加藤が「一種の故郷」を見出したのは重要である。第 3 段落にも「京都とは、故郷を離れることで見出したもう一つの故郷である」(36～37 頁、改 41 頁) という一節がある

(2)「京都の女(ひと)」とは誰か？

- 加藤といつどのように出会ったかは描かれず、唐突に登場する→「その女(ひと)」は、京都に生まれ育ち、唯識論に凝る仏教学者であった夫に若くして先立たれ、子どもが一人いる。初出誌には、最後に「よく笑ったが、大きな声をたてることはなかった」[2]という一文があった
- 「京都の女(ひと)」は実在しないと思われるが、モデルの一人となったのは、加藤の最初の妻であっ

[2] 加藤周一「続 羊の歌 4　京都の庭」『朝日ジャーナル』1967 年 7 月 30 日号、78 頁。

た中西綾子（1924～2001）だろう→綾子は、愛知県名古屋市に産婦人科医の中西培一郎・ちよ夫妻の長女として生まれる。実兄は心理学者の中西昇（1911～61）。1944 年 9 月に東京女子大学（英文学専攻）を卒業し、1946 年 5 月 30 日に加藤と結婚した（二人は見合い結婚だった）。また、加藤に綾子との結婚を強く勧めたのは、母織子だったという。しかし 1962 年 1 月 29 日、協議離婚に至った[3]

第 2 段落　京都の庭

私はまたひとりで京都の町を歩き、折りにふれて古寺を訪ねることをいつしか慣しとするようになった。その頃、古寺の庭は、どこでも静まりかえっていた。竜安寺の石は、初冬の午後の陽ざしに、長い影を投げていた。春の雨に濡れた西芳寺の苔は、誰も見ていないところで、ただ私だけのために、木洩れ陽を受けて、ところどころ燃えるように輝いていた。そこには観光客と自動車の騒音のない京都、室町時代から変らず、しかも現代の日本からは全く忘れられた多くの寺とその庭があった。その頃の東京は、西洋人の考えを翻訳し、解釈し、議論することに忙しく、東洋の古い文化は、捨ててほとんど顧みなかったように思われる。神田の古本屋では漢籍が二束三文で、雑誌の目次・新刊書の表題の、日本の古美術に触れたものは、ほとんど見つけることができなかった。私は乏しきを投じて漢籍を購い、古寺を訪ねて作庭の跡を賞するのに、その時代を利用したといえるのかもしれない。（35～36 頁、改 40 頁）

(1)「私はまたひとりで京都の町を歩き、折りにふれて古寺を訪ねることをいつしか慣しとするようになった」

◦戦後まもない 1946～49 年頃、加藤は折にふれて京都を訪ね、古寺の庭を見た。どのようなきっかけで、京都の庭に関心を持つようになったかは記されない→加藤が訪れた、竜安寺と西芳寺の庭は、「陽ざし」「雨に濡れた」「燃えるように輝いていた」といった言葉で描写される

①龍安寺…右京区にある臨済宗の寺。1450 年細川勝元の創建で開山は宗舜。細川氏代々の墓所。室町末期作の石庭は一面に白砂を敷き、大小 15 個の石のほかに一木一草もない枯山水で、「虎の子渡しの庭」ともいう。鶯鳶寺（『広辞苑』）

②西芳寺…西京区にある臨済系単立寺院。山号は洪隠山。天平（729～749）年間行基の創建と伝える西方寺を、1339 年夢窓疎石が開山となって禅寺として中興し、改称。疎石の築いた庭園は庭苔におおわれ、苔寺と通称（『広辞苑』）

◦「ひとりで」とあるが、1950 年前後の加藤の文章には、「知人の心理学者」[4]＝中西昇と共に京都の庭を廻ったと記されている→中西昇は、京都帝国大学文学部心理学科の出身で、1940 年代には龍谷大学助教授であり、京都北白川に住んでいた[5]

---

[3] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018 年、341、486～495 頁。

[4] 加藤周一「何が美しいかといふこと――庭とブギ〔ママ〕ヴギとについて」『女性線』1949 年 5 月号、13 頁。

[5]「〔加藤は〕「日本の庭」（『文藝』一九五〇年二月号、『自選集 1』所収）を著わしたが、そのとき「To Professor N. Nakanishi」という献辞を付けた。しかし、同著作が収録された『美しい日本』（角川書店、一九五一）

(2)「京都」と「東京」との二項対照

◦「そこには観光客と自動車の騒音のない京都、室町時代から変らず、しかも現代の日本からは全く忘れられた多くの寺とその庭があった」⇔「東京は、西洋人の考えを翻訳し、解釈し、議論することに忙しく、東洋の古い文化は、捨ててほとんど顧みなかった」

◦「何が美しいかといふこと――庭とブギ〔ママ〕ヴギとについて」(『女性線』1949 年 5 月号)

「一言でいへば、東京から京都へゆくといふことが、何処か日本ならぬ所から日本へ帰るかのやうに感じられるのです。わたくしは前にもたびたび京都へいつたことがありますが、住んでゐたことはありません。それにもかゝはらず、東京には西洋風の文化と日本風の文化とが複雑なかたちで混りあつてゐるのに反し、京都には日本風の文化ではなく、純粋に日本的な文化のあることが、その郊外の風景のなかにも直観される。戦争以後、江戸の文化は影もかたちもなく消え失せましたが、京都には多くの古い建物があり、われわれの文学史的想出からきりはなすことのできない多くの山や川があり、又何よりも風俗や習慣や人々の趣味の上に古い文化の生みだしたもろもろのかたちが今も明かにのこつてゐます。〔……〕とにかく、散歩の気まぐれにあまり有名でない庭にたちよつたわたくしたちは、その庭の美しさをとほして、嘗て栄え、いまもその跡を京都にとどめてゐる一つの文化、おそらく日本にあつた最高の文化の構造を、想像しました……」[6]⇒1950 年代半ばの「雑種文化」論を彷彿とさせる内容[7]

◦「両大戦間の東京は、思えば不思議な街であった。そこには沢山の翻訳文学と、印象派以後の絵画の複製と、ドイツ浪漫派の器楽があり、それは日本の伝統的な文化を忘れさせるには充分で、西洋の文化を理解させるには不充分であった。」(「戯画」『羊の歌』135 頁、改 153 頁)

◦戦後まもなくの「西洋人の考えを翻訳し、解釈し、議論することに忙しく、東洋の古い文化は、捨ててほとんど顧みな」い日本社会・文化の風潮(≒明治初期)に反し、加藤は神田の古本屋で漢籍を購い、京都の古寺を訪ねた

第 3 段落　「京都の庭」と「京都の女(ひと)」

そうしてある秋の日の午後、ある禅寺の庭で、不思議なことが私におこった。その庭の結構は格別のものではなく、東山の斜面を巧まぬ借景として、そのまえにしつらえた枯山水の、小さなものにすぎなかった。しかしその庭の姿は、刻々と変化してやむことがなかった。東山の黄葉が傾きかけた陽ざしに映えるかと思えば、さっとかげって、枯山水は俄に灰色の底に沈み、また陽がさすかと思えば、白い砂の上に音もなく銀色の雨が落ちて、石組みの緑の石が甦ったように鮮

には初出誌にあった献辞がなくなり、その代わりに「あとがき」に中西昇の名前を挙げて謝辞が記される。その後の論集には同著作が収録されても、中西昇には触れられなかった」(鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』341 頁)。

[6] 加藤前掲「何が美しいかといふこと」12～13 頁。

[7] 半田侑子「加藤周一と「日本語の運命」――雑種文化論の過程」『立命館大学人文科学研究所紀要』133 号、2022 年、242～249 頁。

かに輝き出す。それは一つの庭であり、しかも一つの庭ではなかった。よろこびと悲しみ、華かさと憂いが、一瞬の表情に現れては消え、しかもそのすべてが控えめな一種の形――その時々の姿を越えた一つの形としかおそらくいいようのないものにおいて、実に微妙に統一されていた。たしかに私はまだ庭を見はじめたばかりで、好奇心にちかいものを感じていたはずだろう。しかしそれにも拘らず、そのとき、ほとんど突然に、これ以上に私にとって身近な世界はありえないだろうということを、不思議な確実さで感じたのである。それは、その世界に対する私の理解の確かさでもあり、私の何かがその世界に属しているということの確かさでもあるはずだった。私は生れて育った東京を離れることで、ある一つの確かなもの――私の外にあるものと内にあるものとの一つの確かな関係――に出会った。京都とは、故郷を離れることで見出したもう一つの故郷である。ひとりの女のあらゆる表情を、私がそこに読んでいたということであろうか。おそらくそうではなくて、女のなかにその世界の反映を見ていたのであろう。私はその後庭ばかりでなく、仏像をみるようになったし、またいくらか絵も見るようになった。また日本の美術ばかりではなく、むしろそれとは直接に何の関係もない事柄について、多くの文章をつくるようになった。しかし私は「日本の庭」を以て書きはじめ、一五年経った後にも、まだ「詩仙堂志」を書いていた。私は西洋を見物したために、日本の芸術の有難さを知ったのではない。ある秋の日の午後、東山の斜面に映える西陽を見、枯山水の白砂に落ちる雨を見たから、やがて西洋見物の望みを抱くようになったのである。（36～37 頁、改 41～42 頁）

(1)「ある秋の日の午後、ある禅寺の庭で、不思議なことが私におこった」

- 加藤が偶然、訪ねた「ある禅寺の庭」は、「結構は格別のものではなく、東山の斜面を巧まぬ借景として、そのまえにしつらえた枯山水の、小さなもの」。どこの禅寺の庭かは明らかにされない
- 「ある秋の日の午後」の時々刻々と微妙に変化する庭の、光と影に彩られた美しい情景描写。第 2 段落と同様の「陽ざし」「雨が落ちて」「鮮かに輝き出す」＋「黄葉」「灰色」「白い砂」「銀色の雨」「緑の石」といった色彩を表わす言葉の多用→「それは一つの庭であり、しかも一つの庭ではなかった」。「その時々の姿を越えた一つの形としかおそらくいいようのないものにおいて、実に微妙に統一されていた」
- 「これ以上に私にとって身近な世界はありえない」。「その世界に対する私の理解の確かさでもあり、私の何かがその世界に属しているということの確かさでもある」。「私は生れて育った東京を離れることで、ある一つの確かなもの――私の外にあるものと内にあるものとの一つの確かな関係――に出会った。京都とは、故郷を離れることで見出したもう一つの故郷である」⇒「その世界」＝「日本文化」と自己との間の「確かな関係」。加藤は自身の内部に「日本文化」が、深く刻みこまれていることを認識した

(2)「女のなかにその世界の反映を見ていた」

- 「よろこびと悲しみ、華かさと憂いが、一瞬の表情に現れては消え、しかもそのすべてが控えめな一種の形」→「京都の庭」を擬人法的に表現

◦第一段落における「京都の女（ひと）」＝第二段落における「京都の庭」であり、京都の「女（ひと）」（の言葉遣い）と「庭」は共に、それ自身が属する「日本文化」を反映している

加藤周一『美しい日本』（角川書店、1951 年）より

（3）「私は「日本の庭」を以て書きはじめ、〔……〕まだ「詩仙堂志」を書いていた」

◦「日本の庭」（『文藝』1950 年 2 月号）は、『美しい日本』（角川書店、1951 年）に収録される[8]

「戦時中に偏つて不当に高く評価された日本の芸術と文学とは、戦後には、偏つて不当に低く評価されるか、むしろ忘れられようとしてゐる。しかし、日本の文化の偉大さと惨めさとは、同時に二つながら認められないかぎり、一方が正しく認められるといふこともないはずである。／わたしくしは、ここにあつめた作家論のなかで、美しい日本をつくるための条件を考へようとした。何故なら、美しい日本は、すでにあるものではなく、絶えずつくりだすべきものだからである。」[9]

◦京都の古寺などの庭から受けた印象や美的感動を基に、類型論 typology によって、修学院離宮・龍安寺・桂離宮それぞれの庭の素材や様式、その背後にある精神を比較検討する

①京都（桂離宮）の庭は、「日本的なもののなかで、もっとも日本的なものがある。しかし、も

[8] 『美しい日本』には、巻頭の「日本の庭」の他に、「鷗外と洋学」「漱石に於ける現実」「木下杢太郎の方法」「芥川龍之介小論」「太宰治、または文学者の道徳について」「宮本百合子と民主主義文学論」「「現代詩」第二芸術論」「日本語の運命」が収録されている。

[9] 加藤周一「あとがき」『美しい日本』角川書店、1951 年、239～240 頁。

っとも日本的なものこそは、もっとも普遍的なものであろう」[10]⇒加藤の芸術論の核心。「けだし芸術的創造性は、自国――あるいは故郷――の文化があたえる条件の特殊性を徹底的に追求した極限において、芸術の普遍性へ向ってつき抜ける（のり越える）運動によってのみ成立する」[11]

②政治権力と芸術・文化との緊張関係→「「一方には政治と権力があり、他方には藝術と文化がある」〔ブルーノ・タウトの言葉〕という場合に、この両者の相反は、藝術家の一身において超克せられねばならぬと同時に社会的にも超克されなければならない。〔……〕藝術家の人格のなかにおける闘いを社会的なひろがりの中にもち来す」[12]

◦小説「詩仙堂志」（『展望』1964 年 11 号）…『三題噺』（筑摩書房、1965 年）の 1 つ。詩仙堂の庭を訪れた語り手と、そこに現れた老人（石川丈山）との会話劇。元は徳川家康に仕えた武将であったが、晩年は詩仙堂を造営し隠棲した江戸初期の漢詩人・書家の石川丈山を通じて、「日常的人生」への徹底が描かれる[13]⇒戦後の加藤の問題意識や文筆活動の持続が示される

（4）「私は西洋を見物したために、日本の芸術の有難さを知ったのではない」

◦京都の庭を見たから、「やがて西洋見物の望みを抱くようになった」→「日本回帰」を否定。「青年のとき欧米の文物に心酔し、齢を重ねて後日本へ回帰するということが、私の場合にはなかった」[14]

◦『続羊の歌』連載当時の 1960 年代後半、加藤は日本文化史・日本美術史に関わる著作を精力的に発表し始めていた[15]→その一方で、このような加藤の仕事に対し、つきまとう「日本回帰」との評価[16]⇒加藤は自身の現在の仕事の原点となった、戦後まもなくの経験を明らかにすることで、「日本回帰」との批判を一蹴し、その問題意識と文筆活動の一貫性を示そうとしたのではないか

第 4 段落　「西洋見物」の動機

---

[10] 加藤周一「日本の庭」『加藤周一著作集 12　藝術の精神史的考察Ⅱ』平凡社、1978 年、初出 1950 年、164 頁。

[11] 加藤周一『日本文化における時間と空間』岩波書店、2007 年、252 頁。

[12] 加藤前掲「日本の庭」156 頁。

[13] 加藤周一「三題噺」『加藤周一著作集 13　小説・詩歌』平凡社、1979 年、395～396 頁。なお石川丈山については、加藤周一『日本文学史序説　上』ちくま学芸文庫、1999 年、436 頁。

[14] 加藤前掲「日本の庭」〔追記〕166 頁。

[15] 鷲巣力『増補改訂　加藤周一を読む――「理」の人にして「情」の人』平凡社ライブラリー、2023 年、174 頁。

[16] 例えば、加藤に対する同時代評として、「昭和二十七年からフランスへ渡り、その後カナダのブリティッシュ・コロンビア大の教授になったり、一時は祖国喪失の観があったが、最近ではナショナリズムを強調している」（大隈秀夫・村上兵衛・丸山邦男・村島健一「特別企画　日本を動かす 100 人の文化人〈教祖族からお茶の間派まで〉」『文藝春秋』1967 年 10 月号、126 頁）。

留学生試験のときに試験官が、「いかなるフランスの作家に、汝は格別の愛着を感ずるや」とフランス語でいった。その質問にしかるべき答えをすることができなかったのは、その頃の私がフランス語でものをいうことに慣れていなかったからである。しかしその質問が私をおどろかせたのは、言葉のためではない。たしかにフランスの作家をいくらか読んではいたけれども、そのときまで私はそういう質問を私自身に向って発したことがなかった。あるいはむしろ、そういう問いに、言下に確信をもって答えることのできるようなし方で、いかなる作家も読んでいなかったからである。何かに「格別の愛着を感ずる」のは、その場で考えて決めるようなことではないだろう。あらゆる考えのまえに、動かすべからざる愛着――京都の庭に対した時のように、そのものと私との間に確かな関係がなければならない。その確かな関係を説き明かそうとすれば、古今集以来の歌にもつながり、またひとりの女の言葉の抑揚にもつながり、またあるいは子供の私が渋谷の家の二階の窓から眺めていた道玄坂の上の夕焼けの空にもつながって来て、半生を以てしても尽きない考えがそこから溢れ出して来なければならない。しかし西洋の文学については――その一面がはっきりしていたので、隔靴掻痒というのとはちがうが――庭をまえにして感じたあの理解の確かさを、嘗て感じたことがなかった。ということに気がついたのは、私が庭を見たからである。西洋の文化と遠い昔の日本の文化とは、私にとってどうちがうのか。その問いに答えずに、そのままで先へ行くのはごまかしになるだろう、と私はそのときに感じた。西洋を見物したら答えが出て来るだろうと思ったのではない。しかし西洋見物を先へのばす理由はなかった。(37～38 頁、改 42～43 頁)

(1)「留学生試験のとき」

- 加藤は、1951 年にフランス政府の募集する政府給費留学生試験を受験[17]→1951 年 11 月にフランス政府半給費留学生として渡仏
- フランス語での試験官からの質問「いかなるフランスの作家に、汝は格別の愛着を感ずるや」に加藤が驚いた理由→①フランス語での会話にまだ不慣れだった、②フランスの作家をいくらか読んでいたが、「格別の愛着を感ずるや」という観点からは読んではいなかったため、返答に窮した

(2)「そのものと私との間に確かな関係」

- 「何かに「格別の愛着を感ずる」」には、「あらゆる考えのまえに、動かすべからざる愛着」＝「京都の庭に対した時のように、そのものと私との間に確かな関係がなければならない」→「古今集以来の歌」―「ひとりの女の言葉の抑揚」(第 1 段落) ―「子供の私が渋谷の家の二階の窓から眺めていた道玄坂の上の夕焼けの空」(「美竹町の家」『羊の歌』) にもつながる
- 加藤は「京都の庭」を見ることで、「日本文化」と自己との間には確かな関係があることを確信したが、「西洋の文化」は書物を通じて理解していたものの、「庭をまえにして感じたあの理解の確かさを、嘗て感じたことがなかった」⇒「西洋の文化と遠い昔の日本の文化とは、私に

[17] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』350 頁。

とってどうちがうのか」。その問いに答えるために、「西洋見物」に行く必要がある→医学研究が目的であることは、一切述べられていない